

迫伊都子 (大阪府・摂津市) 2

高野春枝 (埼玉県・上尾市) 3

祐森水香 (埼玉県・川越市) 4

「俳句と身体」① 俳人 黒岩徳将 16

にいがた  
食の歳時記  
～南蛮えび～



皆さんは「南蛮えび」というエビをご存じだろうか。正式名称「ホッコクアカエビ」。「甘えび」とも呼ばれるエビだ。新潟では、その見た目が「南蛮」(唐辛子のこと)に似ているから「南蛮えび」と呼ぶのだそう。全国の漁獲高では、新潟は北海道に次いで2位。佐渡や新潟市、糸魚川が産地である。南蛮エビの卵はキレイな青色をしている。その色が名産のヒスイに似ていることから、糸魚川では「ひすい娘」という名称もついている。身は何をしてもおいしいし、頭もみそ汁に使えるし、卵もしょうゆ漬けで珍味としておいしくいただける。新潟では、ちょうど今くらいの冬が旬。寒いこの時期、南蛮えびのお味噌汁でもいかがでしょうか。

喜怒哀楽

詠み人応援マガジン・詩歌俳壇ニユース

2-3  
Vol.108

「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。



温古知新 60

「菜根譚」 32

春が待ち遠しいこの季節。寒さに閉じこもりがちですが、そんな時はテレビも良いですが、読書でも！

巧を拙に蔵し、晦を用いて明とし、清を濁に寓し、屈を以って伸とす。真に世を渉るの一壺にして、身を蔵するの三窟なり。

(優れた才能を拙いもののように隠し、暗いようであるが、清らかなものをそっくりと見せ、腰を低くしているように実は伸び伸びとしている。これが真の世渡りの術であり、身を隠す三つの隠れ家なのである。)

あまりひけらかし過ぎずに控えめに、ということでしょうか。

衰頷の景象は、就ち盛満の中に在り、發生の機織は、即ち零落の内に在る。故に、君子は安きに居りて、宜しく一心を操り、以つて患を慮り、変に処りて当に百忍を堅くして以つて成るを図るべし。

(衰退の兆しは隆盛の時に始まり、芽吹きは葉が枯れ落ちる時に始まっている。故に、君子は安定している時に心を落ち着けて危機管理し、非常事態にしっかりと耐える準備をしておくことが必要である。)

奇に驚き異を喜ぶは、遠大の識無く、苦節独行の者は、恒久の操に非ず。

(珍しい事に驚き、変わった事に喜ぶのは、先見の明が無く、苦境にあつて意地でも己を貫くことはいつまでも続くものではない。)

一喜一憂しすぎたり、極端に走るのではなく中庸を保つことが、難しいけれど大切！

怒火慾水の正に騰沸する処に当たりて、明々に知得し、又、明々に犯着す。知るところ、是れ誰ぞ。犯すところ、又、是れ誰ぞ。此の処、能く猛然として念を転ずれば、邪魔、便ち真君と為ん。

(怒りの火と欲望の水が、正に沸騰する時には、解ついても失敗を犯してしまう。解ついても失敗するのは何故だろうか。これをしっかりと考えて発想を転換すれば、失敗を犯した心が、正しい行動をする心になるだろう。)

ミスも発想の転換ができれば成功に変わる。大きな失敗も成功の元になれるはず！

私の今年の目標は「程々」。難しいですが、極端に走らず、平静に、己を見つめてまいりたいと思います。(古川久美子)

# 迫伊都子様 『歌集 冬暁』

(大阪府・摂津市)

昨年11月に三冊目の『歌集 冬暁』を出版された迫様に、ご自宅併設のギャラリーでお話をお聞きしました。

**Q 素敵なギャラリーですね**

ここを始めたのは2011年夏。上の子は子どもの頃から絵を描くことが好きで、今は生業にしている。同様に母もアマチュアながら絵を描く人で、孫を応援していたが彼が大学に入った時に亡くなった。親馬鹿だが、母の遺作と息子の二人展をしたくて、茨木駅前のギャラリーを借りて催した。いろんな方が絵を見てくれて「同じ学校だったのね」とか、多くの出会いがすごく楽しいなあと思った。それがきっかけ。自分では描けないのにね。

**Q 描けなくても歌を詠めます!**

歌はね、恥ずかしいの、歌集を出したことも。そこが矛盾している(笑)。私の歌は日記のようなもの、日記を公



▲「日々のなかでびっと光ったことを歌にしているだけ」と話す迫さん

開するのは恥ずかしいでしょ。だから常に揺らぎつつ、でも30年くらい詠み続けている。父親が61歳で亡くなっているの、もう何があってもいい年齢。いずれ終点はくるとか思っている。

**Q 30年前は30代ですね**

少女の頃から詩を書いて投稿したりすることが好きだった。子育て中、短歌がライトベースとして流行り始め、雑誌に投稿したら採ってくれるので勘違いしちゃった(笑)。自分のペースでできるので、40代半ばくらいまで10年以上投稿歌人を続けていた。歌会も全く出ていなかったが、2004年に「未来」に入会し、投稿したものと未来の作品を併せて2011年に『歌集 雨月食堂』を出した。

**Q 今回の『歌集 冬暁』は?**

自分の中で絶対に残そう、という歌に丸をして千首以上をようやく六百首ほどに削った。それが一番大変で、選んだ歌を打ち込むのは振り返りでもあり、想いが昇華されていく時間だった。『雨月食堂』は夫と暮らした日々を永久に保存したくて編んだもの、そして今回の『冬暁』はほとんどが挽歌。夫が亡くなって10年余、最初の1



▲「歌集 冬暁」見た瞬間、歌集の表紙にと直感した絵

年は生き死にを考えたら歌なんて何の意味があるの?と歌から離れた。でも歌は気持ちを吐露する手段でもあり、「自分にとって大切なものを詠みなさい」という先生の教えを支えに、少しずつ再開することができた。そして毎月10首以上の歌がたまり続け、どうしたものかと逡巡していた。

**Q 何かきっかけが?**

毎年、展示会をしてくださっている水彩画家の小林冬道さんという方がいらして、ちょうど搬入の日の朝に描いたという絵を見た瞬間「私のための絵だ!」と思っただけ、気に入った。それが冬暁という絵で、歌集の題名に。すぐに「今日の日も会いたき人がいることを冬暁に向かい告げぬ」という歌が生まれた。不思議な必然が背中を押してくれた。

読んですぐにハガキや手紙をくれた人たちもいて、それを読んだらこちらが泣けた。書に歌を書いてくださる方が泣けた。歌をやめようと思っていたが続けることにした、という方も。読んでよかったですと思う方が一人でもいたら逆に励まされるし、自分の歌にも愛着がわいてくる。

**Q これからは?**

ギャラリーも、こんなことをしたいという構想が広がって面白くなってきているので、しばらくは頑張ろうと思う。次は自分の好きな絵を集めて、東京か大阪でアートフェアを開いて、その次はアジアでとか…妄想ですけどね(笑)。自分の好きな絵を「いいなあ」って言っ



▲ひと月10日間開催の「ART GALLERY 5」

てくださるのがうれしい。お披露目に呼んでいただき、インターネットに凝った素敵な空間に、その絵がはまっているのを目にするのは至福の時。あと歌はずっと共にいるもの。歌会で、誰にも認められない歌を出しても、また行きたくなる不思議な魅力があるの(笑)。

『歌集 冬暁』より

大阪に救われているところあり天  
神橋筋友と歩けば  
久方の光降る中過ごししは君や子  
らとの翠の時間  
灯台を二つ眺めた今日の日は記憶  
の海に浮かぶのだろう

★「悲しい歌が多かったので、どんな方なのだろうと思ったら全然悲しい方じゃなくて…」と失礼にも申し上げると、「あっはっは!そうですよ。何の苦労もなさそう、と言われるの。痩せてきてたらいいのに、ふっくらしているから」とチャームキングに笑う。ご夫婦で子どもの追っかけをしていたという子煩悩の迫さん。確かに存在した折々の幸せの時を刻み、永遠にとどめた二冊の歌集。子煩悩は未来をつくり、歴史は市井の人がつくる。家族、人とのつながり、つまりは愛が未来をつくと素直に感じた。(木戸敦子)



# 高野春枝様

## 『日々のつれづれ2』

(埼玉県・上尾市)

昨年10月に二冊目のエッセイ集『日々のつれづれ2』を出版された高野様に、ご自宅でお話をお聞きしました。



▲結婚60年のダイヤモンド婚式典の朝

**Q** 旦那様というお写真ですね

ダイヤモンド婚式っていうの？市から招かれてその式典の朝、孫が撮ってくれた。夫は今91歳、穏やかで真面目な人で、わがままでお喋りな私とは正反対。だから喧嘩にもならず60年やってこられたのですね。結婚前、高尾山に行ったとき、祖母がおに



▲「姉と妹と井戸木(地名)の三婆は健在」と笑う高野さん

ぎりを5個新聞紙にくるんで持たせてくれた。あまり喋らないしつまらない。結婚しなくてもいいと思っていたので「これ私のだから私は3個、2つあげるわ」と。きつと家に帰ってから母親に言ったんでしょ「女つぷりは悪いけど、食いつぷりはいい」とかなんとか。そして「じゃあ丈夫だ」ということで、結婚することに(笑)。

**Q** 健康なのですね

そんなことないのよ。7か月足らずで生まれたから身体が弱くて、往診に来た先生が白い布をかぶせて帰ったつてくらい。所帯持ってこの土地に戻ったら、その時のI先生が「あっ、死んだ春枝ちゃんだ！」って(笑)。だから結婚前に勤めていた時も、不安で社員旅行に行ったことがなかった。それが今では、息子夫婦に「死ぬのも忘れてごめんね」という始末。一昨年、大腿骨骨折で40日間入院した時は休んだが、50歳の時から36年間毎朝欠かさず歩いている。昨日と今日では空気も景色も会う人も違うし、句材が転がっている。ウォーキングをして夏は風呂に入り、お茶を飲みながら新聞に目を通すのが日課。

**Q** 書くことは好きだった？

8人兄弟で田舎の兼業農家だったが、父は「少女の友」や小学生新聞を買ってくれ、家ではリーダーズダイジェストも取っていた。そこに投稿したのが最初。出版社に勤めていた叔父は、よく本を持ってきてくれた。同じページが重なっているような出来損ないの



▲時々のエッセイと俳句からなる『日々のつれづれ』2冊

本。そこに穴を開けて糸を通して、トイレに吊るすの。落し紙につて。だから年中トイレが長いつて怒られた(笑)。読売新聞や埼玉新聞に投稿するようになったのは、娘が小学校3年生の頃。今は掲載前に事前に連絡があるけど、ある日自分が書いたものが載つていてびっくり。父は91歳で亡くなったが、死ぬ直前まで父を慰めたのは読書と新聞。私の掲載記事は切り抜いて、何度も読み返していたらしい。

**Q** 『日々のつれづれ2』を出版された経緯は？

なぜか俳句も書くことも始めたらしめめないの。だから別れることも知らずに60年(笑)。新聞投稿と『こだま』に掲載された原稿と俳句を入れて一冊とし、今回は二冊目。『こだま』は読売新聞「ぶらざ」の投稿者によるグループ「こだまの会」が、年に3回刊行している文集で欠かさず投稿している。他の方はダンスの全国大会に出たり、カラオケで優勝したりと何事かを極めているのに、我が身を振り返ると何とも中途半端な生き方をしてきたと反省

しきり。記憶は不確かとなり、5年10年の誤差はざら。だから記録するのは大事なこと。読み返せばある程度時代がわかるし、いい悪いではなく、身内にだけでもささやかな記録を残しておきたいと思った。

**Q** これからは？

あと15年きりなんですよ、100歳まで(笑)。何の準備もないが、月の世界に行つてみたいと年中言っている。そうしたら「初夢や月への旅の切符手」のごとく、初夢を見た。最近、ホリエモンや前澤友作さんを見る目が変わつた、どうすり寄ろうかと(笑)。根気はなくなってきたが、これからも休みなく書き続け、一番年寄りだからと祭り上げられている俳句の会もできる限りは続けていきたい。

★何度かお会いしたが、駅からご自宅まで切のいい運転で颯爽と送り迎えをしてくださり、お茶を出してくださいる際には「適当な裏表千家です」といつも笑わせてくれる高野さん。60年の月日の中には、病を得た旦那様をただただ寝たきりでもいいから死なせないようにと内職で支え、二人の子を希望の学校にあげた話、無理がたたり自身も病を得た話、月5000円の会費が払えずに俳句の会をやめた話など、活字にはできない話がまだまだあった。

形なきものの重さや十二月 春枝

悲壮感を全く感じさせないその生き様は、中途半端どころか、奥義を極めていると感じた。(木戸敦子)

# 祐森水香様

## 祐森水香句集『柘榴』

(埼玉県・川越市)

昨年11月に句集『柘榴』を出版された祐森様に、お話をお聞きしました。

### Q 素敵なお着物ですね

着物を着る習慣が身についたのはお茶のおかけ。大学入学と同時に「お茶をしなさい」と母に言われ、母の顔を立って1年だけという約束が現在まで35年も。正座に慣れるのに2年近くかかった(笑)。見た事も触った事もないものばかりで、和室での立ち居振る舞いからお道具まで、やることなすこと知らない世界。隅から隅まで日本の伝統文化一色で引き込まれた。お薄茶で使う茶杓の銘は季語そのものだし、お茶の先生が俳句をされていて、俳句の嗜みも必要と思えば興味を持った。それが35歳の頃。

### Q その後は?

いくつかの結社の雑誌を取り寄せ、



▲着物姿も素敵だが、洋装も帽子から靴までバッチリの祐森さん

同じ川越にある「遠嶺」に手紙を書くところから「初心者講座にいらっしやい」と。ところが行った日は最終回で、いきなり俳句を三句用意すること。とまどいながら初めて出したのが「シャボン玉天球の青分かれゆく」という句で、想い出深く今回の句集の最初に入れた。驚いたことにその句が最高点句になり、そのまま「遠嶺」に入ってから9年間、様々なことを経験させていた。

### Q 俳句の素養があったのです

どうなのでしょう。一人っ子で鍵っ子だったから、よく家で詩とか書いていた。結婚してからは小説を文芸誌に応募し、いいところまでいった作品のタイトルが『柘榴』だった。それも一番最初に書いたもので以後は選ばれなかったから、小説は無理かな。次第に子育てで忙しくなり、そんな時にお茶の先生が「俳句はどう?」と勧めてくださり「小説に比べたら簡単にできるだろう」と思ったらできない(笑)。短いつてすごく難しいなあ、でも面白い!というところで方向転換を。

### Q 今回の『柘榴』が第一句集?

「遠嶺」を退会後、水内慶太先生に出会い「月の匣」の創刊とともに編集長に。とても自分の句集まで手が回らなかった。今回句集を編んだことで、日々休みなく俳句を詠んでいる時には見えなかったものが、段階を踏んでわかってきた。選句をしている時、一冊の本になった時、読んで感想をいたした時、今後どうという俳句を作り、ど



▲和紙風のカバーと落ち着いた色合いの句集『柘榴』

う変わっていききたいのか。客観的に自分の俳句を見られたし、句集がなければ昨日と同じことを続けていただろうから、遅ればせながらまとめてよかった。そして、句集を出したことで生まれ変わりたいと思った。

### Q どのように?

変わりたいと思っている割に、根っこは変わらないから、今後どう表現するかということ。ただ変えるには荒っぽいことをしないと変わらない。祖父は俳句の結社を持っていた人で、今、手元にあるこの薄っぺらい句集だけが残っている。五七五に縛られていないし、今までの私の作り方だったからこれはダメでしょうという句ばかり。それなのに不思議と魅力を感じ、このリズムを身につけられたらいいなと繰り返して読んでいた。とても刺激になるし、冒險するきっかけになればいいと思っ。最初は受け入れられなかったが、今読むと共感するし、やはり同じ血が流れていると感じる。

### Q これからは

初め俳句は自分を晒しているみたいですが、恥ずかしかったが、いつの間にか見られることを前提に作っているという面白い文芸。この面白さがわかれば俳句を続けてもらえるだろうと思っ。カルチャー教室でもアピールしている。皆さん人生経験が豊富で優しくて「先生は若いから知らないよね」とフォローしてくださる。でも知らない鑑賞ができないから、去年は奈良に4回行き一人旅に開眼した(笑)。長年やっているのと、どうしても自己類想を作ってしまうがち。それだけは避けたいから、常に今をはみ出していき

### 句集『柘榴』より

遠景の少女へと吹くしやぼん玉  
紅波甲や恋の遍歴きかれをり  
小ぎれいに暮らし小菊を輝かす  
黒髪につながってゐる冬の海

★一度、句会を取材した際に祐森さんの席題の句のすばらしさに目をむいた。今は月に10の句会に参加し、3カ所のカルチャー教室で教えているが、かつては1日5句作ることを3年続けたり、編集長だったころは本を多読し文法もかなり勉強したとか。一朝一夕には成し得ない鍛錬が集約して今がある。ただそんなことは一切感じさせず、何においてもスマートでおしゃれで、ワインを飲みながら語る様はほれほれする。常にここではないどこかへ。とどまることがなく、新しい俳句を作りたいという言葉が印象的だった。(木戸敦子)





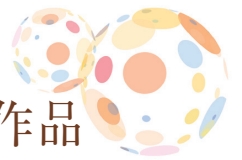
# 投稿作品

## 川柳

- 1 ストレスの解消法は食べる買う  
細川光子(栃木県)
- 2 エジソンの灯りは要らぬ薪能  
木村洋一(新潟県)
- 3 明日も何も無きことを祈りおる  
原 崇雄(埼玉県)
- 4 台風に苦しまされても化石賞  
守屋高雄(岩手県)
- 5 この南瓜ずっしりドラム詰まってる  
鈴木義雄(福島県)
- 6 にごり酒うきうき弾む夕げ時  
久保壽雄(北海道)
- 7 快方へ嬉しいピンク瓜の色  
小山恵美子(大阪府)
- 8 何の列か分からないまま最後尾  
長谷川庄二郎(千葉県)
- 9 習慣でといでしまった無洗米  
和崎治人(山口県)
- 10 老いた母を責めてしまった日の枕  
目黒豊光(福島県)
- 11 手術前問う生きて何をしたいかと  
奥 那於子(大阪府)
- 12 その写真すぐに昔へたどりつき  
松島章子(兵庫県)
- 13 旅が無事終わる我が家のウォッシュ  
丸山芳夫(東京都)
- 14 情に泣き情に笑って喜寿となり  
近藤富夫(東京都)

## 俳句

- 15 八十路坂まだまだ夢が溢れてる  
西山知子(岡山県)
- 16 『二帯一路』習近平の忘想許せない  
伏見の馬酒(京都市)
- 17 I R予想のとおり汚職生む  
石尾曠師朗(東京都)
- 18 馬のかほ長きままにて祭かな  
喜龍けん(滋賀県)
- 19 こほろぎの声びたり止む猫近し  
齋藤光雄(新潟県)
- 20 つつましく母の遠忌や風花す  
環 順子(東京都)
- 21 鯛雲借景にしてローカル線  
高崎登喜子(東京都)
- 22 病衣着て手足はみ出す秋の暮  
松嶋光秋(東京都)
- 23 裸木の墨絵となりぬ夕茜  
大塚徳子(埼玉県)
- 24 梅去りし桜ちらほら待つ宴  
西條公雄(埼玉県)
- 25 小さき日のことあれこれと餅を焼く  
大谷 茂(埼玉県)
- 26 作務僧の籠にあふるる朴落葉  
鈴木清子(埼玉県)
- 27 振り返ることのみ多く花八ツ手  
竹本美美子(新潟県)
- 28 年越しや松一枝を無人駅  
渡部 仁(山形県)
- 29 人が住まぬ家また一つ冬深し  
中嶋清子(佐賀県)
- 30 炭二つ足して笑顔の雪達磨  
浦橋渴雪(兵庫県)
- 31 時という良薬あり冬銀河  
内河邦久(東京都)
- 32 焼栗を懐に入れ永平寺  
古谷 力(東京都)
- 33 息ひそめ令和の除夜の鐘をきく  
阿部澄江(宮城県)
- 34 晩秋の遙けき空に鐘一打  
阿部徳夫(宮城県)
- 35 極月のシルバースーツに異邦人  
梶 鴻風(北海道)
- 36 医を戻り安堵の炬燵深ねむり  
重原爽美(新潟県)
- 37 何時の間に日差し移ろひ干布団  
大阿久雅子(埼玉県)
- 38 チャンチャンコ頭壊れし弟のいて  
金子範子(高知県)
- 39 年新た迷いまだある九十路  
日名子春実(群馬県)
- 40 表札を隷書で彫れば冬深し  
溝畑万年青(埼玉県)
- 41 古い騙す電波は憎し冬銀河  
井上静夫(栃木県)
- 42 小窓より小犬のワルツ春の雪  
高野ほづ子(千葉県)
- 43 黒猫のクロと呼ばれて冬ぬくし  
高松玲子(埼玉県)
- 44 ストープはやはりマツチよ老二人  
坪田勝秀(鹿児島県)
- 45 はやぶさ2日本向う冬銀河  
島村幸重(兵庫県)
- 46 からきしの下戸を唸らす寒の水  
小林七重(新潟県)
- 47 ならめつこ強き五歳児達磨の忌  
吉里ひとみ(東京都)
- 48 ひとり酌む形見の盃や櫛あかり  
小島岳青(新潟県)
- 49 しぐるるや米寿の兄とラインする  
松尾らん(東京都)
- 50 日向ほこ長寿の先にある不安  
井原穂子(東京都)
- 51 台風の前づく予感耳づまり  
三津木俊幸(千葉県)
- 52 コンドルの翼にのつてくる初春  
早乙女文子(埼玉県)
- 53 庚子祝ふ神籬初明り  
野木宗信(奈良県)
- 54 雪映えの南天の実鳥啄む  
井上氣海(広島県)
- 55 度忘れの滅法ふえし日向ほこ  
居原田 暹(大阪府)
- 56 霜柱苔を持ち上げすと立ち  
古閑智子(神奈川県)
- 57 すきやきを家族で食べる冬の夜  
原田治男(東京都)
- 58 新しい家族迎へし福寿草  
天野輝子(東京都)
- 59 口に絵筆星野富弘あやめ描く  
山崎吉晴(群馬県)
- 60 滾る湯にほぐし入れをり手打蕎麦  
杉原明子(静岡県)
- 61 帰校児の選ぶ近道冬木立  
神 一男(静岡県)
- 62 エレベーター乗れば聖樹をかけ登る  
寺内 侖(埼玉県)
- 63 ひとときは古都潤ませし時雨かな  
濱田イサオ(福岡県)
- 64 ならだらかに海に向かひし蜜柑山  
平林義康(兵庫県)
- 65 喜寿超えてこのときめきは不整脈  
橋本世紀男(東京都)
- 66 あたらしき年あらがへよあらがへよ  
福岡 悟(東京都)
- 67 木枯しに終着駅のなかりけり  
吉村充治(埼玉県)



# 投稿作品

- 68 未来より今が大事と老いの冬  
杉村美保子(岩手県)
- 69 指と指触れて落葉の別れ道  
中田文子(大阪府)
- 70 推敲に吐息を加ふ師走の夜  
佐野和彦(静岡県)
- 71 振出しに戻れぬ人生絵双六  
長峰正晴(千葉県)
- 72 筆洗ふ黒き流れや水温む  
清 まさし(静岡県)
- 73 数え日や集えば戻る若さかな  
堀木和子(大阪府)
- 74 数へ日を数へるほどの用もなし  
近藤ともひろ(千葉県)
- 75 ふるさとの新米神に供へけり  
津布久信雄(東京都)
- 76 堂々と老いるがよろし実万両  
岩村 昇(神奈川県)
- 77 鍋のものを囲むひととき三日かな  
小澤円梨(静岡県)
- 78 ふり袖に残る首里城紅型は  
佐伯セツ子(香川県)
- 79 都鳥光の中へ飛び行けり  
檜山柚子香(東京都)
- 80 年越や大声広ぐる兄の家  
川嶋法子(東京都)
- 81 冬の日やおとぎ話に子はねむり  
青木ケン子(埼玉県)
- 82 饅頭包む慈愛も込めて今朝の秋  
花貫 寥(東京都)
- 83 いただきし紬のマフラー手にやさし  
中島光江(埼玉県)
- 84 トロピカルフルーツ珊瑚礁の海  
山田富朗(埼玉県)
- 85 小競りあいありて整ふ鴨の陣  
田中 昶(鳥取県)
- 86 ぬるま湯で洗えばゆるむ冬の顔  
岩田 信(神奈川県)
- 87 枯草の間に間に黒土もぐら塚  
星 一子(神奈川県)
- 88 筆まめな父を想いて日向ぼこ  
井田由利子(宮城県)
- 89 冬帽子無能を隠すこと多少  
望月哲土(東京都)
- 90 風邪で臥す妻の指図の夕御飯  
磯部 力(新潟県)
- 91 天空の調べ木枯らし聴き入りぬ  
若月理依子(新潟県)
- 92 恙<sup>つが</sup>無く令和迎春祈り上ぐ  
有坂馨園(福島県)
- 93 山眠る田畑もねむり町明かり  
田中恵美子(山形県)
- 94 春暁や誕生月の光生ふ  
九法活恵(埼玉県)
- 95 喫茶ルノアール窓枠の冬紅葉  
松尾憲勝(神奈川県)
- 96 滝多し八千八谷秋に入り  
宇都木安子(東京都)
- 97 真青な空をそびらに冬の薔薇  
片山茂子(埼玉県)
- 98 妻癒えて言葉少なし帰り花  
上村元義(神奈川県)
- 99 外面でみんな生きてる寒さかな  
今井勝子(新潟県)
- 100 冬柏やっぱりごめんと言いました  
北野耕兵(千葉県)
- 101 ユダになる恐れ抱きて濁り酒  
関山恵一(神奈川県)
- 102 水路掘る医師の訃報や寒帛  
こんくにを(東京都)
- 103 息白く蒔割る老父腕まくり  
藤井春三(埼玉県)
- 104 泰然と寿命と対峙去年今年  
大窪美代子(大阪府)
- 105 枯葉かく太鼓の音や神迎へ  
小田ゆかり(新潟県)
- 106 今や減る善根宿の徒歩遍路  
間森 坦(兵庫県)
- 107 凧はりリールマルレーン惑星よ  
安部 哲(新潟県)
- 108 い、夢を見たく舟折る良夜かな  
鏡たか子(山形県)
- 109 いつまでも世の定まらぬ踏絵かな  
すぎき笑子(東京都)
- 110 雪吊りの張りに矜持のあるごとし  
富高邦弘(埼玉県)
- 111 霜焼や母のまじなひ欲しき夜  
一瀬正子(埼玉県)
- 112 私の心新たな年の暖かさ  
湯浅暉子(石川県)
- 113 除夜の鐘住めば都と響きけり  
湯浅芳郎(岡山県)
- 114 鉛筆の折れた跡ある古日記  
近澤有孝(広島県)
- 115 内浦をゆうがに白鳥翔つ構へ  
堀田寿美子(北海道)
- 116 瘤白鳥のモンローウオーク御慶かな  
光成高志(千葉県)
- 117 歳末は安売り多し商いは  
宇田川正雄(埼玉県)
- 118 まっすぐに朝日さしこむ開戦日  
佐藤 信(神奈川県)
- 119 枯鳶の館夕べのミサの鐘  
本庄準也(埼玉県)
- 120 忙しや数へてみたき雪女  
本間ミネ(新潟県)
- 121 ぼつねんと誰をまつのか冬かもめ  
本間 進(新潟県)
- 122 おでん屋のひよいと聞こえる国訛り  
堅田秀子(東京都)
- 123 母言いし酒食<sup>さけ</sup>べてかと古酒新酒  
津田卿雲(岡山県)
- 124 存へし背中が語る日向ぼこ  
橋本 絢(東京都)
- 125 開戦日忘るなと師の言ひ残す  
中野勝子(鹿児島県)
- 126 未知の世へ一歩踏み出す大旦  
道給一恵(埼玉県)
- 127 富士に向くバーズンロード春近し  
桜井葉子(千葉県)
- 128 海老蔵の大見得切りて厄落  
小泉芝雲(千葉県)
- 129 冬陽浴び小名木の翁とあさりめし  
白松いちろう(千葉県)
- 130 海の日や部屋の内縁替えてみる  
鈴木公子(千葉県)
- 131 狼煙めく筑波山麗落葉焚  
坪井研治(東京都)
- 132 伏して待つ盲導犬や冬うらら  
永田歌子(埼玉県)
- 133 喜寿の妻に聖火走者のお年玉  
渥美 保(滋賀県)
- 134 することのありて日出度き老の春  
伊藤 修(埼玉県)
- 135 元旦や永遠の今ありにけり  
中村康浩(福岡県)
- 136 ざわざわと鳥の去りたる木守柿  
木村徳夫(東京都)
- 137 湯豆腐とぬる爛でよし吉田類  
締次直代(岡山県)
- 138 インバウンドが年送りする戎橋  
中山日出子(大阪府)
- 139 クリスマス孫からもらうプレゼント  
田村よし(茨城県)



140 すばらしき御代は令和の初日の出  
門田善二(兵庫県)

141 葱畑深き畦間を北下し  
安田芳江(茨城県)

142 辻神の幣旅立ちぬ春一番  
菅原キイ子(宮城県)

143 初日待つ熱きもの売る店も出て  
若林卓宣(三重県)

144 ワンチームに冬の列島沸きにけり  
清水君江(埼玉県)

145 森の木もあちこち穴あいて黄葉す  
浅海和代(神奈川県)

146 朝寒の妻に夜具足す介護かな  
仁藤ひろじ(埼玉県)

147 菜の花やをさなさのころおよめさん  
内藤紀子(埼玉県)

148 松飾増えし家族の写真撮る  
中岡宗治(三重県)

149 夢に逢ふ母若かりし十三夜  
柴田恵美子(北海道)

150 一〇二歳恩師の喪中賀状かな  
大野寿子(大阪府)

151 皇居にも裏門のあり石路の花  
福山三智子(東京都)

152 西の空朝めずらしき虹の橋  
長谷部喜代子(大阪府)

153 世の中の平和を願う初詣  
松前邦広(千葉県)

154 七日齋うまし旨しの人の居て  
高垣勝代(大阪府)

155 鳩の笛残して湖の広さかな  
椋本望生(大阪府)

156 霧走る見えかくれするロープウェイ  
沖 惇子(大阪府)

157 産土に初日の射して被ひけり  
中川義彦(新潟県)

158 ラグビーの哲学するやこの深さ  
齊藤安弘(神奈川県)

159 理不尽と思いまあいつわぶぎの花  
奥屋裕子(広島県)

### 短歌

160 中村さんにあげたかったな平和賞  
ほしがるひとにあげたくはない  
黒澤正行(福島県)

161 こんな時四島の観光するのによ  
念ゼ口国に吾は悲しき  
早坂絃司(北海道)

162 里紅葉土に還らむころざし踏め  
ばくれない滲む悲しさ  
青木日出男(群馬県)

163 両陛下祝賀御列晴れやかに笑顔絶  
やさずお手振りくるる  
峯岸信子(東京都)

164 いわなで訊かないで解り合う夫  
婦になりて終の日近し  
寒川靖子(香川県)

165 息子は言うスマホに切り替えろ頭  
の体操とボケ予防になるよ  
濱崎祥子(鹿児島県)

166 預かりし犬返さずに過ぐる正月願  
いし家族小犬可愛  
大橋絵代(千葉県)

167 ビル群も海底なればサンゴかもス  
カイツリーに眺めいるなり  
土屋喜雄(山梨県)

168 四十年寺につくして旅立ちぬ色は  
なやかな参道もみじ  
本田智恵子(東京都)

169 春風に小さくゆれてかたくりが母  
とすこせし里に咲きおり  
富樫佐與子(新潟県)

170 天寿とは何歳なのと問われたり答  
えあぐねる八十余歳  
田中豊恵(新潟県)

171 年の瀬に衣類に頭をなやませる楽  
しむ時かと思いつながら  
高橋登志子(新潟県)

172 父の語る思い出話にうなづきつ  
最期の時を手をつなぎる  
森 由恵(奈良県)

173 緑なす我が庭園に紫金草春を待た  
ずに鳴く鶯  
合田浩子(茨城県)

174 片栗粉踏む様子なりこの雪はチロ  
と散歩の青い空  
田中こづえ(北海道)

175 わが歌集に興味みせしと云う孫の  
ページに見入る写メール届く  
桑原謙一(群馬県)

176 汗のみにあらず涙も滴りて亡き  
人々の姿目裏にたつ  
渡部美代子(山形県)

177 富士の山初雪被り雄大な橋の上よ  
り手を合わせられし  
大鳥居牧子(東京都)

178 枯れ葉散る午後の公園人気なく紅  
葉色づき冬の近しか  
中澤敬子(千葉県)

179 激動の昭和を生きて米寿逝し行方  
知らずに令和を歩む  
久本に地(岡山県)

180 あかあかとナースの詰所あかりつ  
き人の動きが目立ち始める  
岩崎弘舟(岡山県)

181 三が日駅伝ファンテレビの前でお  
せち食べておとそで祝う  
新井 賢(埼玉県)

182 あざ笑う如く楽器に変装してや  
られたりレバノンの空  
守安幹男(岡山県)

183 アイドルは脱皮重ねて蝶になり海  
峡渡り美しく舞ふ  
内藤明子(東京都)

184 揚げ足取りばかりの野党日本の未  
来図語れ国会の場で  
村山徳英(埼玉県)

185 美しきフォーレの曲をチェロで弾  
くミッシヤ・マイスキーはキリスト  
に似て  
萬濃その子(神奈川県)

186 女まご令和正月トソの席米寿いな  
らび三人目を聞く  
高須 孝(愛知県)

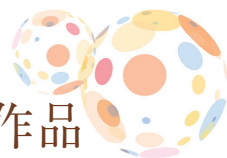
187 鐘の音に一輪開く寒桜の華やぎ迎う  
参拝の道  
関原幸子(東京都)

188 令和二年何があろうと頑張ろう独  
りじゃないぞスクラム組んで  
早坂保文(宮城県)

189 幸せは人それぞれの形あり「今が  
幸せ」夢かなわずも  
岩崎令子(大阪府)

190 洗い張り義母の着物はひと冬の仕  
立てなおして新品となり  
相馬 純(新潟県)

※12-1月号の投稿作品180番に誤りがありました。ここにお詫びして訂正申し上げます。  
誤 男ひとり淋しさに耐えクラス会長  
正 男ひとり淋しさに耐えクラス会  
長谷川庄二郎(千葉県)



# 投稿作品

## フォトイック

こちらの写真を見て詠んでいただきました。



(写真提供：伊丹三樹彦さん)

- 203 生きてかった姿やきつく御節膳  
早乙女文子(埼玉県)
- 202 懲りないね又逃げ出して諦めな  
小山恵美子(大阪府)
- 201 冬の蟹さてさて料理考える  
井原穂子(東京都)
- 200 ずわい蟹値札つけられ店頭  
島村幸重(兵庫県)
- 199 高値蟹売れ残りたりわたくしも  
有田裕子(北海道)
- 198 初時雨頼る身にして自己主張  
日名子春実(群馬県)
- 197 競り落とし大松葉蟹に見惚れる  
大阿久雅子(埼玉県)
- 196 松葉蟹裏返るかと見てあたり  
梶 鴻風(北海道)
- 195 はずかしや何をそんなに見ているの  
阿部徳夫(宮城県)
- 194 生きたいのお願いだから逃がしてよ  
阿部澄江(宮城県)
- 193 裏返し鮮度で値切るさあ幾ら  
青木日出男(群馬県)
- 192 逃げ出して行くあてのなき蟹一尾  
高崎登喜子(東京都)
- 191 考へる売るか食べよかずわいがに  
齋藤光雄(新潟県)
- 204 タラバ蟹腹いっぱい喰いていなあ  
濱崎祥子(鹿児島県)
- 205 往生をしてるカニさんとの別れ  
長谷川庄二郎(千葉県)
- 206 どちら産?ボイルが旨いズワイガニ  
和崎治人(山口県)
- 207 夜行バスに「かに」のネオンの煌煌と  
居原田 暹(大阪府)
- 208 ここは何処助け求める松葉蟹  
天野輝子(東京都)
- 209 隙あらば海まで逃げる松葉蟹  
山崎吉晴(群馬県)
- 210 蟹よりも肉付の良き母の在り  
神 一男(静岡県)
- 211 ハッケヨイ仕切り負けしてす(す)と  
奥 那於子(大阪府)
- 212 たかが足駄駄を握ねずに起きなさい  
寺内 信(埼玉県)
- 213 吾輩はカニの大王頭が高い  
橋本世紀男(東京都)
- 214 満足はしてをらぬ今春を待つ  
福岡 悟(東京都)
- 215 ずわい蟹どうでもしと見榮を切る  
佐野和彦(静岡県)
- 216 見ているも芸も出来なきあ泡も出ず  
長峰正晴(千葉県)
- 217 楽しみは酒一合と鰯場蟹  
近藤ともひろ(千葉県)
- 218 とらわれの蟹動き出す朱の爪  
小澤円梨(静岡県)
- 219 かくさずにさらけ出しなよ堂々と  
佐伯セツ子(香川県)
- 220 正月がくれば又カニたべられる  
檜山柚子香(東京都)
- 221 一休みもう一勝負する構へ  
川嶋法子(東京都)
- 222 冬夕焼美味かと思つむずわい蟹  
星 一子(神奈川県)
- 223 雪虫やここまで来れば観念す  
井田由利子(宮城県)
- 224 売れ残り酒の肴にしてやるぞ  
田中豊恵(新潟県)
- 225 初競りの幸先祝う太き蟹  
九法活恵(埼玉県)
- 226 エビス顔カニ鍋かこむ夕餉待つ  
高橋登志子(新潟県)
- 227 競り売りはカニと戯れ秋彼岸  
宇都木安子(東京都)
- 228 数へ日や料理しやうか遊ばうか  
片山茂子(埼玉県)
- 229 股広げ勝手にしてカニは言い  
合田浩子(茨城県)
- 230 お正月かにさんごめん腹の中  
渡部美代子(山形県)
- 231 今年も大きく育ってくれたなあー  
大鳥居牧子(東京都)
- 232 採れたての蟹の刺身が食べたいなあ  
大窪美代子(大阪府)
- 233 年末は灯の切れ易し蟹逃げし  
安部 哲(新潟県)
- 234 惚れ惚れと眺めていますデカイ蟹  
鏡 たか子(山形県)
- 235 カニを見て海に感謝幸祈る  
五味田幸夫(東京都)
- 236 ずわい蟹陸を歩けと言はれても  
光成高志(千葉県)
- 237 成仏しますどうぞおすきなように  
久本にい地(岡山県)
- 238 茹でられて御身着飾るずわい蟹  
本庄準也(埼玉県)
- 239 さていくらの蟹につく値段かな  
本間 進(新潟県)
- 240 かにもらいお返しするのを困ってる  
岩崎弘舟(岡山県)
- 241 ふる里の海の宝や松葉蟹  
堅田秀子(東京都)
- 242 食べたいな越前蟹をじっと見る  
中野勝子(鹿児島県)
- 243 いたぶらずこのまま往生させてくれ  
貝瀬光洋(神奈川県)
- 244 今は無しおやつに食べた越前カニ  
大木和男(埼玉県)
- 245 手も足も全くでない高根花  
守安幹男(岡山県)
- 246 トランプや猿蟹合戦始まりし  
関原幸子(東京都)
- 247 逃げられるものならにげよこの余裕  
岩崎令子(大阪府)
- 248 待ちどおし豪華な料理タラバガニ  
松前邦広(千葉県)
- 249 うちのこと放つたらかしてずわい蟹  
椋本望生(大阪府)
- 250 このカニを如何にして料理するべえ  
齊藤安弘(神奈川県)

## 俳句・川柳募集!!

右の写真から、自由にイメージし五七五(俳句か川柳)で表現してください。応募はアンケートハガキ投稿欄にてお待ちしております！  
(写真提供：伊丹三樹彦さん)







「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございました！その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。  
※大賞と自句自解コーナーは年1回です。

◎俳句部門

2 人間は人間なんだ十二月八日

福岡 悟(東京都)

・先の大戦開戦の日を思い出して。小学校六年生の時でした。齋藤光雄(新潟県)・先の大戦記念日、云い得て妙。土屋喜雄(山梨県)・兄二人戦死、私も九十近くなりほんとうに兄達がなつかしい。青木ケン子(埼玉県)・人間は人間なんだ人間だものまったく良くも悪くも!!開戦の日と取り合わせが利いている。九法活恵(埼玉県)

22 足るを知る米寿となりて枯芙蓉

内河邦久(東京都)

・足るを知るにほっとしました。家族に不満を持った自分を反省しました。峯岸信子(東京都)・米寿と枯芙蓉の取り合わせが良。足るを知るのも年令が必要。寺内侖(埼玉県)・自ら己れを励ます感無量の心境になりました。有坂馨園(福島県)・米寿ともなれば欲は無くなる、酔芙蓉の様に若いうちは真白く年行くごとに淡紅から晩年は紅色に変わり枯れていきたい。こんくにを(東京都)・なかなか意味深い。「枯芙蓉」がいいですね。木村徳夫(東京都)・渥美保(滋賀県)

91 千曲川遊子も悲し颯風楓

中山日出子(大阪府)

・地球は確実に荒廃に向かっている。その原因を作っているのは我々人間なのだ。井上静夫(栃木県)・島崎藤村の詩を思い出した。小諸なる古城のほとり雲白く遊子悲しむ。高野ほづ子(千葉県)・時事俳句でありながら詩的で

ある。有田裕子(北海道)・千曲川の句を拝読して、高校時代に学んだ藤村の「千曲川旅情の歌」を思い出した。詠まれた如く遊子も悲しむ大水害であった。間森坦(兵庫県)・思ってもなかったあの千曲川、藤村ならずとも胸が痛む。高橋卓二(新潟県)

◎短歌部門

157 もう一度肩に毛布をかけなおし義母の寝息をたしかめて寝む

相馬 純(新潟県)

・義母への優しい心が義務を感じさせない。早坂紘司(北海道)・ありがとうございます。過労に気を付けてください。青木日出男(群馬県)・介護の本質がよみとれる「寝息たしかめ」は情愛がこもる。ここがポイント。田中昶(鳥取県)・老々介護の時代。義務といってしまうとそれまでですが、毎日の事、気が抜ける時はないんですね。田中豊恵(新潟県)・作者のさりげない行為に優しさがにじみ出ている。早坂保文(宮城県)

158 美しき詩の生れし千曲川壊れし河川に叫ぶ悲歌

坂元正憲(東京都)

・詩情が豊か。内河邦久(東京都)・佐久に親友がいます。無事でしたが大きな災害がおこる度地球温暖化対策他々気をひきしめています。合田浩子(茨城県)・藤村の詩を思い出してテレビの惨状に言葉も出ない。久本にい地(岡山県)・千曲川の被災、一日も早く美しき川への復興を願う。守安幹男(岡山県)

162 首里の城燃ゆるニュースにしがみつ き五色の宝消ゆるを嘆く

守安幹男(岡山県)

・努力して首里城の再現を望む限り。大橋絵代(千葉県)・私も訪れたことのある首里城。その焼け落ちる映像は衝撃だった。再建を願う。桑原謙一(群馬県)・同感です。一日も早い復興を祈ります。岩崎令子(大阪府)

◎川柳部門

167 押入れの火鉢に母の音がする

木村洋一(新潟県)

・母の形見の火鉢が押入れに保管されている。そこからの母の優しい声で「寒かったら使いなさい」と声がする。ノスタルジの味が良いですね。長谷川庄二郎(千葉県)・「火鉢」にあったかさが感じられる。近藤富夫(東京都)・川柳らしい作品なのに重い感じが感じられお人柄がしのべれます。萬濃その子(神奈川県)

172 紛らわしい番地三なの二二なの丸山芳夫(東京都)

・私も似たような：「二〇八」を「二のハ」と間違われないう気をつけます。細川光子(栃木県)・時々見かけます。西條公雄(埼玉県)

183 亡き母の歌が聞える里の川

鈴木義雄(福島県)

・幼少の頃を思い出して懐かしく思い出した。久保壽雄(北海道)・しんみりした中にも母を想う温かさがあふれる句。目黒豊光(福島県)

◎フォトイック  
今回大賞はありませんでした。

◎他にも

8 秋なかば父母のこと思ひ出す

松嶋光秋(東京都)

9 田の面這ふ行雲の影冬に入る

大谷 茂(埼玉県)

39 戦なき世に承らえて星月夜

堀木和子(大阪府)

46 落葉焚き昭和生まれがまだ主役

寺内 侖(埼玉県)

55 仏壇へおろしも添えし初秋刀魚

井田由利子(宮城県)

126 ただそばにつきそふ介護春うらら

本間 進(新潟県)

135 野あそびの知恵おそき子ら怖ず怖ずと仔牛に手触れ腫かがやく

黒澤正行(福島県)

141 杖なしで歩ける事を幸として硬き舗道に背筋を伸ばす

野木宗信(奈良県)

148 雨上り久しい陽射し眩しみて散歩の夫と木陰で憩う

田中豊恵(新潟県)

168 古稀を過ぎ老後が今とは知らなんだ

和崎治人(山口県)

173 ゆつたりと老後過ごせる国であれ

細川光子(栃木県)

196 老いの谷へ落ちないように恋をする

小山恵美子(大阪府)

199 人前に出せぬ姿やこの二人

檜山柚子香(東京都)

※今後もふるってご投稿をお願いいたします！

Q 前回のアンケート  
最近笑ったこと・笑顔に  
なったことは何ですか？

●孫

曾孫の小学校入学記念写真

齋藤光雄(新潟県)

孫娘が酒をのんで俺をいじくるとき

黒澤正行(福島県)

孫が溪流釣りで大物を上げた時

井上静夫(栃木県)

1才8ヶ月のひ孫の成長を見て

高野ほづ子(千葉県)

孫から毎日休みの身分をうらやまし

がられたこと 坪田勝秀(鹿児島県)

「孫」の結婚式に夫婦で参加できた

寺内 侖(埼玉県)

孫に困ったことなにかないですかと

聞かれ嬉しかった

中田文子(大阪府)

ひ孫の七五三の晴姿

堀木和子(大阪府)

孫の言動に感心したり笑ったり

星 一子(神奈川県)

孫が笑いころげる姿につられ笑い

宇都木安子(東京都)

「パプリカ」を歌う懸命な二人のす

がた 合田浩子(茨城県)

昨年生まれた孫の動画

桑原謙一(群馬県)

孫の相手をして将棋で勝ってしまった

木村徳夫(東京都)

泊りに来ていたら歳の孫が帰るとき

「バイバイ」ではなく「お疲れ様でし

た」と言ったこと

有島和子(東京都)

懐かぬ孫がこちら向いて笑った時

中岡宗治(三重県)

●夫

大病の夫の手術が成功して退院の日

一人で笑いたくなりました

寒川靖子(香川県)

誕生日ケーキを前にした夫に、いい

お顔して、といったらとても好顔、

皆で手をたたいて大笑い

田中豊恵(新潟県)

テレビをつけたまま居眠りをしてい

る夫 檜山柚子香(東京都)

酔って炬燵で眠った夫。風呂は入った

と嘘をつき朝髭がのびてバレちゃう

こと 早乙女文子(埼玉県)

●妻

喜寿のワイフが聖火ランナーに選ば

れたこと 渥美 保(滋賀県)

妻がやさしくしてくれるので嬉しい

濱田イサオ(福岡県)

●家族

家族でマをバに置き換えローバの休

日、ローバは一日にしてならず等

言って笑った 橋本 絢(東京都)

娘がようかんを土産に持ってきて私

も羊羹を用意していたこと

田中こづえ(北海道)

親に似る子供の仕草

門田善二(兵庫県)

従姉と何十年ぶりに会って笑顔で語

らった 若月理依子(新潟県)

正月白寿の母が六才のひ孫と一緒に

ゲームを楽しんでいる様子

早坂保文(宮城県)

●ペット

妹から小犬を預かり笑みが増えまし

た 大橋絵代(千葉県)

この十年間に息子が拾ってきた五匹

のにゃんこ。こたつにした途端全

員潜入 松島章子(兵庫県)

我が家の老犬(マルチーズ13才)が

想像妊娠したこと

島村幸重(兵庫県)

美容院のゴールデンレトリバー(オ

ス)が私に笑顔で近寄ってきてくれ

た事 阿部澄江(宮城県)

保護した黒猫三兄弟がすりよってき

てゴロゴロ喉を鳴らす時

高松玲子(埼玉県)

●友達

仲間がスマホの奥様(30才も年下)の

写真を見せながら自慢したこと

山田富朗(埼玉県)

友達の相変らず下手糞の歌ワザと流

行歌モノマネ踊り

清 まさじ(静岡県)

旧友と一パイ飲んだ時

久本にい地(岡山県)

小学校の時から友と月に何回かお

茶して、少しのことにも笑いあっ

ている 金子範子(高知県)

友が書いた似顔絵。似ていなかった

ので手直ししたらなお悪くなった

とき 守安幹男(岡山県)

幼友の賀状で思い出を楽しくおかし

く書かれ笑顔に 内藤紀子(埼玉県)

●自分自身

物忘れに気がついてハツとして笑う

中嶋清子(佐賀県)

質問と全く違う答えをしてしまい大

笑い 田村よし(茨城県)

杖をついている自分がバスが来て思

わず杖をふり上げて走った事

浦橋渴雪(兵庫県)

人様に注意しながら私が部屋で横転

天野輝子(東京都)

買い物して支払をすませ車に乗った

が品物はどこと言って笑った

中野勝子(鹿児島県)

ドジをした事で笑っています

小山恵美子(大阪府)

●お笑い・テレビ番組

朝ドラ「スカレット」のヒロイン

の演技 大谷 茂(埼玉県)

文珍さんの落語

古閑智子(神奈川県)

お笑いが出演するテレビ

長谷川庄二郎(千葉県)

さんま御殿 締次直代(岡山県)

志村けんさんのお笑い番組

松尾正一(岩手県)

月曜日7時からのネプリーグ

仁藤ひろじ(埼玉県)

プレバトで梅沢さんが夏井先生の添

削を「何んでそんなに上手に添削す

るの」と言った事

神 一男(静岡県)

「漫才日本一決定戦」最後三組の決

定戦を見て 間森 坦(兵庫県)

朝「裸の大将」を毎日テレビでみて

笑っています 湯浅芳郎(岡山県)

『東京03』『サンドウィッチマン』の

コント等 鈴木清子(埼玉県)

M1グランプリ優勝ミルクボーイに

は大爆笑 貝瀬光洋(神奈川県)





・きみまろのまんたん

菅原キイ子(宮城県)  
峯岸信子(東京都)

●ノーベル賞

・ノーベル賞の吉野さんの笑顔  
山崎吉晴(群馬県)  
土屋喜雄(山梨県)  
橋本世紀男(東京都)

●旅行

・日帰りバスツアーの中は歓声で一緒に笑いました 張山てる子(東京都)  
娘夫婦と伊豆半島一周旅行  
村山徳英(埼玉県)  
室蘭の白鳥大橋や地球岬の撞くと幸福と云う鐘にも出会えた秋の旅  
堀田寿美子(北海道)

●句会

・学習院句会の忘年会で大さわぎ！  
井原穂子(東京都)  
句会に出ると笑顔になる事が多い  
大窪美代子(大阪府)  
句会の新年会でカラオケをし歌って踊った事  
高垣勝代(大阪府)  
句会の日を間違っ行ってしまったら他の人も来ていたとき  
岩田 信(神奈川県)

●スポーツ

・ラグビー  
高崎登喜子(東京都)  
三津木俊幸(千葉県)  
ヨガで笑いを数回続けること  
小澤円梨(静岡県)  
女子ゴルファー 洪野日向子の笑顔  
津布久信雄(東京都)



・ゴルフ、ロングボール(パー5)三打めホールイン「イーグル」  
上村元義(神奈川県)

・吹矢で満点を出した時  
長峰正晴(千葉県)

●聞き間違い

・車で走行中雨が激しくなり私が「吹き降り」と云ったのを甥が「ゴキブリ」と聞き騒ぎ出して大笑い  
中山日出子(大阪府)  
・同音異義語で勘違いして笑いあった。日本語は難しい  
本間 進(新潟県)

●その他

・雅子皇后さまの素適な「笑顔」  
環 順子(東京都)  
・落語(うなぎの太鼓)を聴いた時  
西條公雄(埼玉県)  
・中学生と俳句の授業ができたこと  
渡部 仁(山形県)  
・ある俳句全国大会で一位に選ばれ笑顔  
内河邦久(東京都)  
・絵画展で私の油絵がたくさん売れた  
有田裕子(北海道)  
・猫カフェに孫と行って癒された事  
松尾らん(東京都)  
・防犯ボランティアで児童の挨拶と笑顔に  
久保壽雄(北海道)  
・編集者の集合写真を見て思わず笑顔  
井上氣海(広島県)  
・JAのくじ引きで新米五キロが当りうれしかった  
杉原明子(静岡県)  
・「喜怒哀楽」十一月号に初めて太字で俳句が掲載されたこと  
吉村充治(埼玉県)  
・台風19号、身内の災害禍中孫達の写真が幼時より無事に出てきた時  
有坂馨園(福島県)

・五十年前の十円玉が断捨離中のコーナーから。ぴったり五十年が何故かうれしかった  
九法活恵(埼玉県)  
・句集を出して多くの人から励ましの言葉をいただいたこと  
松尾憲勝(神奈川県)

・老人の仲間で童謡のコーラスを組んで歌っている時は笑顔  
片山茂子(埼玉県)

・幼稚園でサンタさんをした時の子供たちの輝くような笑顔  
関山恵一(神奈川県)

・木戸さんとの電話でのやりとりかな  
近澤有孝(広島県)

・俳句研修旅行で特選を頂いた  
本庄準也(埼玉県)

若い頃から落語を嗜み、未来は「落語鑑賞と週末は競馬を楽しみ、美味酒肴に囲まれることを理想に、今は働き続ける50代」とおっしゃる北様に、多くの笑いを生む「落語」についてお書きいただきました。

笑って飲んで楽しむ人生

北 駿一



身近な笑いに落語があります。定番の寄席や落語会に出向けなくても、テレビで落語に接する機会は多々あるのでご紹介しましょう。まずはNHKの日曜日早朝の「演芸図鑑」。落語と共に漫才等お笑いも取り上げ、寄席的な笑いも楽しめます。NHKでは「日本の話芸」や落語好き俳優、東山昌大の司会、トークありの「落語デーパー」等、幾つかの落語番組もあります。また、少し高度な落語鑑賞のお勧めはTBS「落語研究会」。600回以上の放送が続く会で、名人芸をたっぷり楽しめます。続いて嘶家の推奨もいたしましょう。一押しは柳家喬太郎。喬太郎の落語ワールドに踏み込み落語に嵌るか、少し若手で勢いのある春風亭一之輔、嘶に色っぽさや艶も感じられる古今亭菊之丞や人間国宝・柳家小三治を堪能するもよしと、自分のお気に入りの嘶家を見つけ追っかけると落語をより楽しめます。できればライブの寄席で落語を楽しみ、終演後、寄席街界隈に繰り出し落語談義で飲むのがよいかと。笑って酒を飲み、酔って人生を楽しみたいですね。



・「喜怒哀楽」表紙の「のっぺ」がカラーで載っているのを見ましてお正月にこれをと  
大鳥居牧子(東京都)  
・朝日俳壇に長谷川權選として入選した時  
小泉芝雲(千葉県)  
・3ヶ月で3kg減量  
坪井研治(東京都)  
・年中笑顔なので特に気に留めた事が無い  
中村久仁子(京都府)  
・市役所の日直業務をしています、ある日婚姻届が5件届出されてうれしかった  
杉村美保子(岩手県)



## 編集室だより

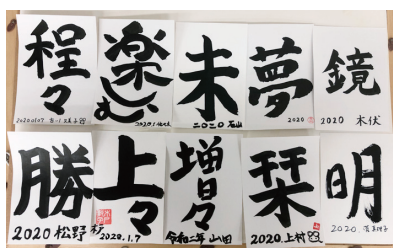
生きているといろんなことが起こります。一日の中でもあんなこと、こんなこと、ほんといろいろとありますね！ そんな日常に転がる喜怒哀楽を、編集室よりお届けします。

■ 本年もよろしく  
お願いいたします

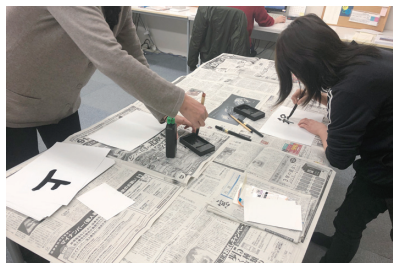


皆様にはいつも温かい応援をくださり、ありがとうございます。おかげさまで新しい年を迎えることができました。今年も「抱きしめていただける本づくり」を心に歩んでまいります。

■ 今年もやりました、書き初め



毎年恒例の書き初め大会を今年も開催。それぞれ今年の目標や思いをこめてしたためました。今号のスタッフ写真で手にしているのは、こちらの書です。それぞれがこめた思いについては、弊社ホームページのスタッフ紹介欄でご覧いただけます。



■ 子どもの絵を作品集に！  
サンプル完成



新しい試みとして、お子さんの絵を作品集にするサービスを開始しました。そしてこのたび、スタッフYとスタッフKの子どもの絵を使って作ったサンプルが完成。「○○ちゃん大きくなったね」「この“う”逆一！」(鏡文字)等々、本を見ながら盛りあがりました。

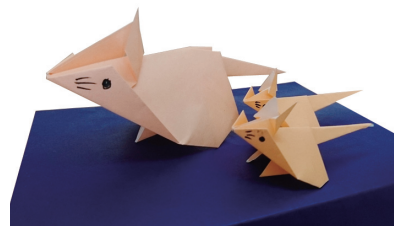


このサービスをhug [ハグ：相手を抱きつつむこと]と名付け、昨年12月にビッグサイトで開催の展示会に出展しました(前号でお知らせが間に合わず、すみません！)。慣れないことでしたが、たくさんの学びを得ました。アドバイスをくださった方、親切にしてくださった方々に感謝です。



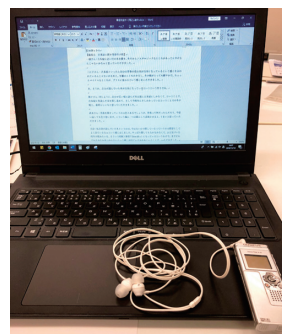
2月5～6日に開催のギフトショーにも出展予定なので、現在はそちらの準備中！

■ 子年



愛知県にお住まいのお客様が、折り紙のかわいいねずみを贈ってくださいました。ありがとうございました。会社の玄関に飾り、お客様をお迎えしています。

■ 音声を、文字に…



本誌「喜怒哀楽」編集の第一歩。お客様へ取材させていただいたあと、お話の内容を文字に起こして記事のもとを作っていきます。写真はテープ起こしの道具たち。昔は本当に「テープ」でしたが、今はこんなに小さいレコーダーに。音声には温度がありますね。皆様に伝わる誌面になるよう、皆で力を合わせて編集しております！



▲玄関のお花も春仕様になりました。





▲並河成資

## コシヒカリの生みの親

### 並河成資

伊豆名 皓美

私たちが毎日食べているお米。そのお米は、稲という植物の実です。現在、新潟は日本一のお米どころですが、昭和の初め頃まで、新潟米はむしろまじいことでも有名でした。本稿では、近代以降の品種改良の歴史の中で大きな足跡を残した、新潟県農業試験場の技師・並河成資（京都府出身・1897～1937）を紹介します。

並河は、地元京都の尋常高等小学校、中学校を卒業後、東北帝国大学農学部予科（現北海道大学農学部）を経て東京帝国大学農学部に進学し、作物学を学びました。1925（大正14）年、農林省農林技師として採用され、指定試験地が併設されている新潟県農業試験場に赴任しました。

昭和初期の北陸地方の米は鳥も食べない「トリまたぎ米」と呼ばれるほど品質が悪く、輸入米に圧倒されていました。もともと雪国の新潟は夏の日照時間が少なく、また刈り入れ時期には秋雨に見まわれず。しかも当時の稲は病虫害に弱く、生産量も不安定で、農家の人々の生活は苦しいものでした。

並河は着任早々、上役から「雪国でも実る稲を作って、農家を幸せにしてやってほしい」と言われました。

この問題を克服すべく、品種改良が続けられました。早生で、良品質の多収米を期待され、並河ら5人の研究者たちは、新品種「水稻農林1号」の育種に成功させました。たくさんの品種から、寒さに強い、多収米、食味が良いなどそれぞれ特長を持つ品種の交配を重ね、ついにすべての長所を兼ね備えた優良品種を開発したのです。この「水稻農林1号」は、いち早く収穫できる早生で、かつ多収・美味という特徴をもち、戦中から戦後の食糧難の時代を救う一助となりました。水稻農林1号をさらに交配改良して生まれたのが、「越の国に光り輝く」ことを願って命名された「コシヒカリ」です。今や質量ともに日本一の評価を受けている新潟産米の「コシヒカリ」の誕生に、先人たちの地道な努力があったのです。

後に並河は、新設された農林省農事試験地中国小麦試験場へ主任技師として栄転。国産小麦の増収を目指して、小麦の新品種の育成に尽力しました。1937（昭和12）年に40歳で逝去、14年後には新潟県農業総合研究所（長岡市）の入口に、並河の胸像が建てられました。この胸像の柱石の基底には、水稻や小麦などの作物の種子が封入されています。

#### 【展覧会情報】

#### 企画展示「新潟の米と酒」

会期：2020年3月15日(日)まで 休館日：月曜日(ただし2/24は開館)、2/25(火)





武田菜美と申します。四二歳で故上田五千石に師事、「畦」終刊を経て中原道夫に師事して今日までの二九年間、つまり人生の四割余りの月日を俳句と共に歩んでいます。しかも十四年間俳句の通信講座の添削講師として「推敲を大切にして下さい」とお伝えしています。ところが自分の句を客観的に見直すことほど難儀な作業はありません。私も自句に向き合うたびに四苦八苦の体です。そもそも推敲とは何なのでしょう。先師五千石によれば「言葉縫いを継いで俳句を作ったら、アイロンを掛けたい。それでも皺が寄るようならゆるみ・たるみ・寸法ちがいはあるのだ。常にアイロンのぴしと当った俳句を身につけたいものだ」これが推敲ということ。そこでこれより六回にわたり投句作品を例にアイロンの掛け方を考えてみたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

### 畳みたる日傘の内の火照りかな

昨今は紫外線対策にと日傘を差す男性も見受けられますが、季語の日傘は女性が強い日差を避けるために差すもので、ことに明治時代にヨーロッパから伝わったパラソルにはお洒落な響きがあります。この句の日傘は白い日傘でしょうか。「火照り」がそんなイメージをさそいます。もちろん、炎天下日差し之余熱だけでもかまいませんが、恥じらいで頬を

赤らめることを頬が火照ると言います。どこか作者の心理状態によって発せられた余熱もこの火照りに含まれているように思われます。思い切りお洒落をして出掛けた先でどんなストーリーが展開されたのかと読み手を楽しませてくれる作品ですが、日傘の内が少々理屈っぽく感じられます。内外という説明は避けたいものです。

### たたみたる日傘にこもる火照りかな

#### 定年ははるか彼方に昼寝覚

さて作者は在職中でしょうかか退職後でしょうか。どちらとも読むことができそうです。ピンと甘いように感じられます。仮に定年後とすれば悠々自適の日々と昼寝覚ののんびりとした響きが即き過ぎとなります。納得はしますが同義語の並列に終っています。そこで昼寝覚の気分を際立たせるために、企業戦士としての多忙な日々を取合せてみましょう。比較する状況が見えれば印象が鮮明になります。

### 在職の日々をはるかに昼寝覚

#### 滴りの一滴すくう夏の山

滴りは地中から滲み出した水が岩肌や崖を伝って落ちてくる水滴で夏の季語です。下五の夏の山の説明は省きます。また掬うは金魚掬いのように下から上への動作を思わせま

次の一滴の冷たさを待っているという夏らしい句にまとめてみましょう。

### 滴りの一滴を享け次を待つ

#### 秋扇父にも遺る艶話

父にも二字に「まさか」の驚きがこめられているように思われます。ところで遺るには遺産のように後世に伝えたいという意志が感じられます。しかし事が事だけに、できれば風化してゆくことを願って、

#### 秋扇父にもありし艶話

#### 孫つれて見た日遥かな大花火

何の破綻もなさそうなこの句に口出しをしたら「なんとという意地悪婆さんか」と言われそうですが、心を鬼にして一言。遥かな日々と遥かな花火のどちらにも読むことができるために今、目の前に花火があるかどうかが曖昧です。季語を生き生きと詠むためには今、花火を見ているという臨場感がほしいものです。

### 揚花火孫と見し日の懐かしく

#### 遠雷やたちまち空の模様替え

雷神と崇められ、「くわばらく」と畏れられる雷です。初めの一打を耳にした時の緊張感を表現するには、模様替えが少々甘いように思われます。

### 遠雷や空の一角はや暗み







## 第7回 井月忌の集い

芥川龍之介が慕い、山頭火が憧れた漂泊の俳人、井上井月を顕彰する「第7回井月忌の集い」が開催されます。

◎日時／令和2年3月7日(土)午後1時

◎会場／主婦会館プラザエフ (JR四ツ谷駅前)

◎当日投句／ 当季雑詠2句1組1500円

◎問い合わせ／ 井上井月顕彰会東京事務所 TEL 03-3341-6975



## 野菜のポストカード

1セット12枚入り1000円(送料込み)です。

今回は「ねぎ」を同封しました。美味しそうな野菜で、季節のメッセージを送りませんか。ご注文は同封の振込用紙をご利用ください。



## 俳句の添削コーナーがスタート

今号より俳句添削講座「工房5・7・5」が始まりました(p.14)。皆さまの俳句がよりよくなるチャンスです。ますますのご投稿をお待ちしております!!

## 『爽樹』新年会・俳句大会・出版記念会を開催

1月26日(日)川越市の川越東武ホテルで俳誌『爽樹』(川口襄代表)の新年会・俳句大会・出版記念会が開催されました。当社では9年前の『爽樹』の創刊号から、またこの度は会員の齊藤道正様の句集『壺中の天』のお手伝いをさせていただいたことから、このお祝いの会にお招きいただきました。

最初に川口襄代表から「今年は爽樹の10周年にあたりますのでいろいろな行事を企画しています」とご挨拶があり、小山徳夫名誉顧問より乾杯のご発声。その後はテーマ別俳句大会「乗り物を詠む」の表彰式、新年俳句大会表彰式、句集出版のお祝い等、盛りだくさんの内容。中締めのアとは会場を移して二次会が開催され、芸達者のメンバーの歌に踊りにと、終始笑顔がこぼれていました。

### 「乗り物を詠む」俳句大会

#### ●特選

稲の香の闇を残して一両車 村田菊子  
一輪車の両手は翼春の風 曷川 克  
満月を乗せて外洋練習船 古川みさを  
歓送の車窓に遠く雪をんな 半田卓郎

#### ●互選高得点句

長江を李白の月と舟下り 村田菊子  
終電のドアにもたれて聖夜かな 町田美枝子  
夜業終へ詩人に戻る終電車 河瀬俊彦  
一輪車の両手は翼春の風 曷川 克  
紅葉にしぶきも染まる舟下り 阿部昭子



▲ご挨拶に立つ川口襄代表



▲右より互選高得点句の阿部様、河瀬様、村田様と川口代表



▲右より互選高得点句の阿部様、河瀬様、村田様と川口代表



## スタッフの一言 Q. 最近笑ったこと・笑顔になったことは何ですか?

手にしているのは、今年にかける想い。詳細はホームページのスタッフ紹介で!

[検索](#)



木戸 敦子  
すごく笑ったことがあるはずなのに思い出せない。鎌倉に行ったら買いたいと思ったものを鎌倉に行くという友達に頼もうと思った思い出せない、もう笑うしかないね(泣笑)



古川久美子  
よく思い出せないのですが、笑っていないことはないはず。きっと、しょうもないことで笑えているという事で、幸せなことなんだろう。



菅 真理子  
何で笑ったのかを思い出せない。会社でも一日一笑、いや三笑はしているはずなのに。言い間違いはよくある、先日「いただきます」と言ったつもりが「いただきます」と...



松野 沙依  
姪っ子が寝返りをうったこと。生まれてからかなりぶくぶくと成長した姪。重そうな体がゴロッと返った時、喜びと安堵で笑顔になりました。



山田 民子  
大学生の娘が2つ上の息子にお年玉をせがんでいた時の会話で笑いました。「お年玉欲しいな」「お前、何年生だっけ?」「3年」「じゃあ、3千円な」「やったー」



木伏美恵  
まさにこのアンケートをまとめている時。島村幸重さんの13歳のわんちゃんが想像妊娠...その状況を想像して、スタッフが集中して仕事するのに笑い声を我慢できなかった。



上村眞智子  
最近81歳の母が入院していて、弟に替えの下着を持って行ってと言ったら、ブラジャーもちゃんが入っていて大笑い!手術後にブラジャーなんかしないでしょう!



石山由希子  
娘(大学2年)と息子(高校2年)の友達や先生の逸話など。先生のお話は爆笑もありですが内容に工夫が伺え、ご本人にお会いしたこともないのに感心しきり。



吉田 瞳  
「ゆったりした服を買って帰り、お嫁さんにこの服いいでしょと見せたら、それは授乳口がついてるマタニティ服だよと言われた」と。ジムで聞こえてきた会話に一人で笑いをこらえました。



佐々木祥子  
家の猫にオムツをはかせた時の事です。気持ちよさそうに仰向けで寝ていた猫の姿が、プーランパンツをはいている様に見え、家族でその姿に爆笑していました。

## 頭

黒岩徳将

仕事以外の時間は、ほぼ俳句に費やしているのでは？と思われる黒岩徳将さん29歳。岡山から東京までの新幹線のなか、怒濤のスピードでひたすら俳句を作り続ける動画を作ったりと、俳句愛はとどまるどころを知らない。6回にわたりお楽しみください。

よりかは、イメージを司る主体として働いている。それは「脚悪き日」では句として成功しないことからわかるだろう。

イメージといえば、頭で重要な句がもう一つ。むしろこちらの方が有名か。

頭の中で白い夏野となつてゐる

高屋窓秋

掲句は、「白」という連作のうちの一句であったのだが、方々でこの句が独立して採り上げられるようになった。四年前、私の所属する現代俳句協会青年部で高屋窓秋の勉強会を行った。そのときに、パネリストの鶴田智哉氏は、

「この句を窓秋の他の句と同レベルに挙げられない」と指摘し、この句があるために、窓秋の他の句の上に括弧付けで「頭の中で」と置くことが可能になると述べた。なるほど、確かに初期の『白い夏野』所収の「山鳩よみればまはりに雪がふる」「月光をふめばとほくに土こたふ」などを念頭に置けば、どれもふわふわとしており、「頭の中」らしさが出ている。三鬼の句と同様、「あたま」と読むか「ず」と読むか意見が分かれそうだが、筆者は「あたま」と字余りで読んで虚の世界に浸る愉悦感を楽しみたい。

頭を詠みこんだ句は、どこかこの世らしからぬ、浮遊感のある句ばかりなのだろうか。そう考えていたら、リアリティを持った身体に引きつけて書かれた句を思い出した。

頭痛の腰痛の心痛のコスモス

金子兜太

身体には、痛みという大きなテーマも伴う。

この中に頭痛のしやぼん玉あらむ

徳将

## ●プロフィール

1990年神戸市生まれ。東京都在住。

「いつき組」所属、「街」同人。現代俳句協会青年部副部長。

「Head, Shoulders, knees and toes knees and toes…」外国の童謡である。日本語では「あたま・かた・ひざ・ぽん・ひざ。ぽん」と歌い、同じ手遊びをする（「つまさき」「あし」では語呂が悪いため、「ぽん」とした訳者の苦肉の策を思う）。英語でも日本語でも、物事の始まりそのものを「頭」と表現するし、心臓以外に撃ち抜かれると即死してしまうのは頭である。チェーン店「吉野家」の牛丼には「アタマの大盛り」というメニューがある。米の量はそのままに、牛肉の量だけ増やす手段だ。頭は最重要パーツのひとつである。

頭という語のある句で真っ先に思いつくのは、次の句である。

西東三鬼

俳句界のトリックスターであった三鬼の代表句のひとつであると言っているだろう。一面の紫に激しい牛、異様な組み合わせだ。他に気になる点は二点。第一に、上五を五音以内で収めるなら「あたま」ではなく「ず」と読むしかない。第二に、「頭悪き」日とはよくよく考えてみるとどんな日なのだろう。ぼおっとしていて思考がめぐらないのか、それとも勉強ができないという意味か。後者ではない気がする。どちらにせよ、げんげ田に牛が暴れているのは実景ではなく、句における主人公のイメージの世界の中の話であろう。「頭」という語は、なくてはならないし充分に機能していると思うのだが、「頭」らしいかどうかと言われたらどうだろう。頭は、物質的なパーツという

2020.2-3. vol.108 (2020年2月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージック・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29

TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

0120-819-395 Facebookもチェック

e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社ミュージック・コーポレーション

## 編集後記

本当に雪が降らない。昨日会った雪の多い長岡市のパパは「5歳の子が“雪が降らない”と言って泣くんですよ」と言っていた。あるべき時にあるものがない不自然さ。知らず知らずのうちに身体に記憶に、自然は自然と刻み込まれている。大変なことも多い雪だが、このまま春になってほしくはないというのが本心だ。さて今号は歌集、句集、エッセイ集を作られた3名の女性が三人官女のごとく華やかに誌面を飾っている。そして2つの新コーナーもスタート。暦の上では既に春。誌面の上で春の訪れをご満喫ください。(木戸敦子)